

星野嘉保子 年表、実家・養家の家系
関連人物

～ 西園寺公望は、誰から嘉保子師を知ったか
光妙寺三郎
島地黙雷
木曾恵禪、野本恭八郎 らの長岡ルート

1. 唯敬寺

- (1) 江戸末期に、上田町から現在地へ
- (2) 赤川と柿川
- (3) 戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所
- (4) 明治初期、長岡花火のはじまり
- (5) 星野嘉保子の星野家菩提寺
- (6) 星野嘉保子・復元像

2. 星野嘉保子碑

3. 大正12年作像の銅像記、像内安置品 及び、現在の嘉保子碑撰文

4. 星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」について

5. 嘉保子年譜、仏教への帰依とご褒美

- (1) 仏教への帰依とご褒美
- (2) 嘉保子年譜
- (3) 実家、養家、竹山家

6. 島地黙雷が星野嘉保子に贈った書

- (1) 島地黙雷さんの漢詩
- (2) 読み方
- (3) 補足

長永寺

江戸末期、木曾恵禪住職と私塾「囂外齋」

星野嘉保子 年表

西暦 年齢

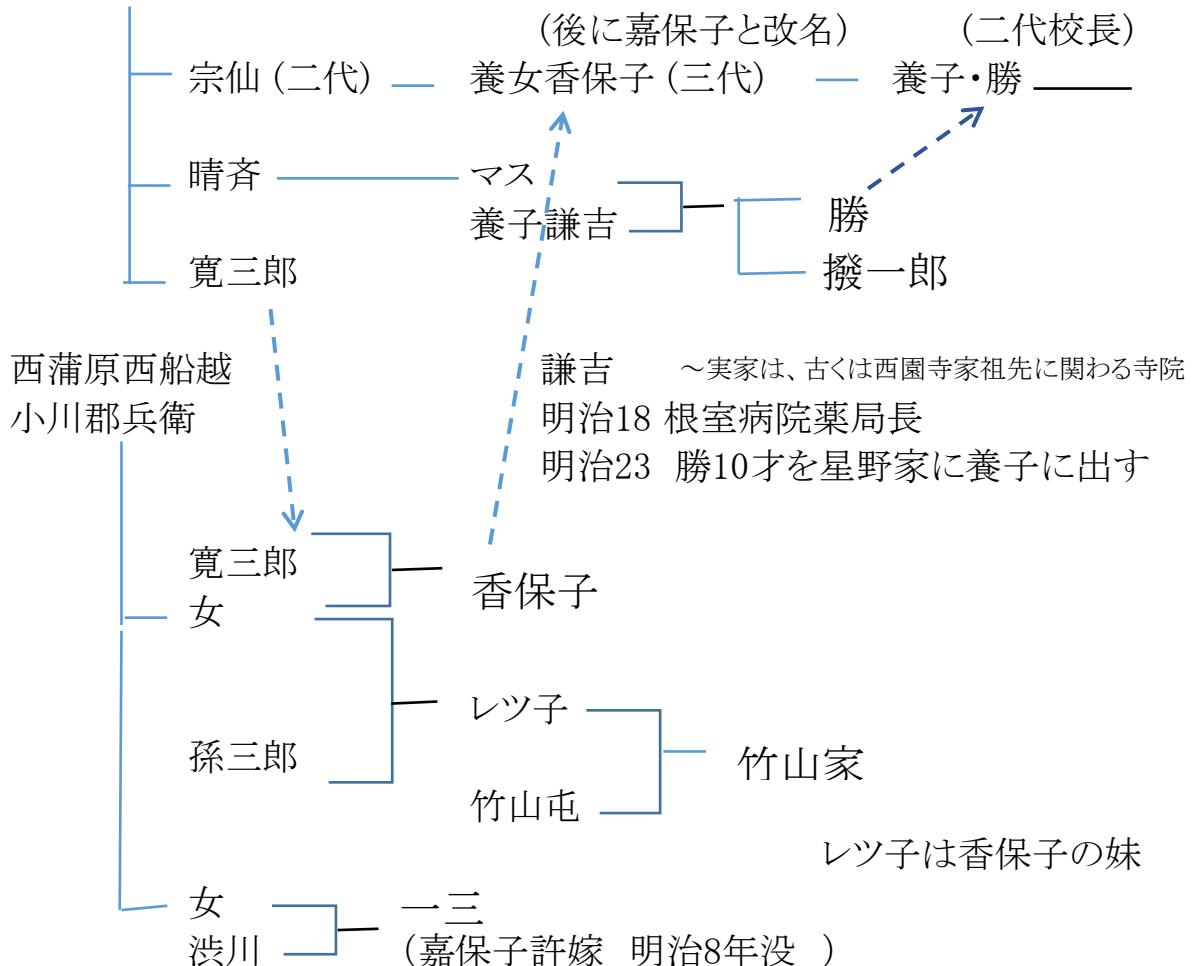
1847	西蒲原郡岩室村西船越庄屋 小川寛三郎の長女として誕生 父は仏教に篤く、母から裁縫を厳しく習った。
1853 6	長岡、表町の二代星野宗仙の養子となる 宗仙の妻は、所謂賢婦ではなかつたらしい
1867 19	二代星野宗仙没
1875	明治8末 縿令永山成輝氏の家庭教師に雇われる 永山氏が懇意の竹山屯に子弟の家庭教師が いないか問うて、屯が嘉保子を推薦。
1875 28	許嫁の渋川一三 没
1876 29	新潟女紅場設立 縍令は1875年11月-1885年4月
1877 30	新潟女紅場総取締となる
1880 33	明治13 長岡山田町に藝娼妓裁縫傳習所設置され、 その父兄らに請われ、その教授となる
1881	山田町唯敬寺で芸娼妓の裁教授に勤める功績で本山・ 本願寺より、念珠。後、明治20年本山より六字名号。 長永寺で開催の婦人法話会で野本恭八郎妻りくと交友
1890 43	長岡女学校開校 勝を養子に迎える
1897	火災被災
1898	観光院町牧野子爵家の別邸を譲受け校舎落成
1899	佛教慈善會を起し淨財を求めて慈善事業に尽力する 島地黙雷師ら高僧を歴訪し、贊意を得て、 木曾恵禪師はじめ地方寺院の篤志家とともに諸方へ托鉢
1904 57	嘉保子 没
1908	西園寺公望 女学校を訪問、「以成肅雍之徳」揮毫
1923	勝 没。学校32年間で閉校 嘉保子像 建立

私感

どうしたら、嘉保子氏のような凄い人物が登場できるのか。
幼少期の養女になる前、星野家に入ってから、更には養父、
許嫁の死のあとと、出会う人、出会う人、それぞれから、
本当によい影響、感化を被ったのであろう。いつも恩徳讃
を口にしたというご本人の資質もあったであろう。
嘉保子師の人生は、ご法話そのもののような気がする。

実家・養家の家系

長岡 表町の医師
星野宗仙(初代)



関連人物

大竹家、竹山家をはじめ、当時の名家は、小国・山口家、蒲原・入澤家、和島・久須美家などと、婚姻や養子縁組などを通じて、お互いに親戚関係を結んでいたことを知るようになりました。

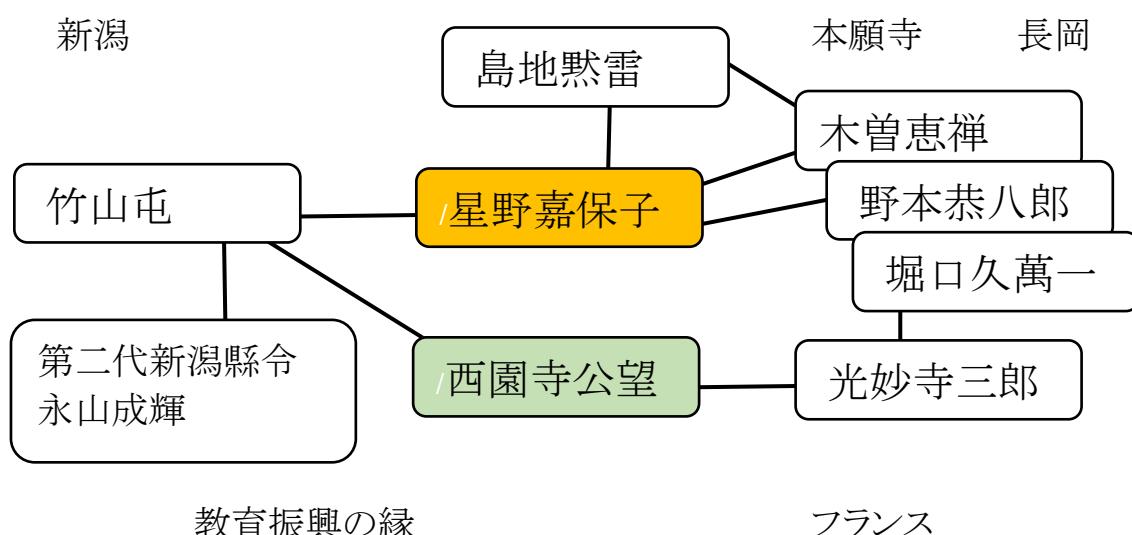
星野嘉保子の実家である蒲原・小川家も、分水・竹山家とつながりを持つていました。

それにしても、西園寺公望公は、嘉保子の没後4年、明治41年(1908年)に、ようやく嘉保子師の教育の足跡を訪ねてきたわけで、西園寺公望公が誰から、どのように嘉保子師を知ったか、大変気になります。

光妙寺三郎という、長州生まれ、浄土真宗の寺で育った人物がいます。1871年に長州藩藩費留学生としてフランスとベルギーに留学し、この間、同じくフランス留学した西園寺公望とパリで親友となり、後に、外務官として活動。西園寺が東洋自由新聞の社長に就任すると官僚のまま編集社員として加わるなど、深いつながりがあります。

外務官として、堀口久萬一と知己であったでしょうし、また戊辰戦争で西園寺おつきの従軍医師を務めた竹山屯から知った可能性もあります。浄土真宗の縁で、光妙寺三郎、島地黙雷、木曾恵禪からかも知れません。あるいは、教育行政にも尽力した第二代新潟縣令永山成輝氏の子弟の家庭教師に雇われたことも、永山氏と竹山屯とのつながりから、ありえること。

関連を図に示してみましたが、何人かの関連人物が重なっていることに驚かざるを得ません。知るべくして知った、ということでしょうか。
深い縁があったのだと思います。



島地黙雷(しまじ もくらい、1838-1911)

明治時代に活躍した浄土真宗本願寺派の僧。周防国(山口県)和田で

専照寺の四男として生まれる。雨田、北峰、六々道人などと号す。

西本願寺の執行長。

1868年(明治元年)、京都で赤松連城とともに、坊官制の廃止・門末からの人材登用などの、西本願寺の改革を建白し、1870年に、西本願寺の参政。

黙雷が1898年(明治31)秋に嘉保子にあてた漢詩が、唯敬寺に伝わる。

嘉保子が仏教慈善会設立のため黙雷師に面会の折りのものと思われます。

1872年(明治5年)、西本願寺大谷光尊の依頼によって岩倉使節団に同行、ヨーロッパ方面への視察旅行を行なった。使節団一行がイギリスに滞在しているとき、このころ条約改正に一定の進展がみられたといわれるオスマン帝国に対して一等書記官福地源一郎が派遣され、同国の裁判制度などを研究させたが、黙雷はこれに同行している。

エルサレムではキリストの生誕地を訪ね、帰り道のインドでは釈尊の仏跡を礼拝した。その旅行記として『航西日策』が残されている。

「三条教則批判」の中で、政教分離、信教の自由を主張、神道の下にあった仏教の再生、大教院からの分離を図った。また、監獄教誨や軍隊での布教にも尽力した。

1888年(明治21年)、雑誌『日本人』の発行所である政教社の同人となる。

1892年(明治25年)、盛岡市の北山願教寺第25世住職となつた。養嗣子の島地大等が第26世となる。

その一方で、明治21年(1888)、仏教に基づく女子教育をいち早く実践し、女子文芸学舎(現:武蔵野大学付属千代田高等学院・千代田女学園中)を創立した。他、幾多の学校運営に参画した。

(星野嘉保子の私立長岡女学校は、明治22年に開校、

黙雷から嘉保子への書は、明治31年)

浄土真宗系の学校であり、仏教に基づいた道徳教育を行っている。

1888年(明治21年)9月 - 女子文芸学舎として現在地に創立

1907年(明治40年)10月 - 女子文芸学校と改称

1910年(明治43年)3月 - 高等女学校令により千代田高等女学校と改称

また、創立者の島地黙雷が目指した「国際教養人の育成」の理念を継承し、国際バカロレア対応コースを設置するなど教育にも力を入れているとのこと。2016年には法人合併によって設置者が学校法人武蔵野大学になった。

2018年(平成30年)からは、高等学校は武蔵野大学附属千代田高等学院と校名変更・男女共学化の上で5つのコースを有する普通科高校となる。

光妙寺三郎(1847 - 1893)

日本の外務官・検事・衆議院議員である。旧姓・末松。

周防国佐波郡三田尻村(現山口県防府市東三田尻)に浄土真宗本願寺派の惠日山光妙寺の和尚・半雲の三男として生まれた。

1865年、長州藩諸隊の一つ鴻城隊に入隊。井上馨の書記役を務めた。

1869年に横浜フランス語伝習所に入学、1871年に長州藩費留学生としてフランスとベルギーに留学した。この間、同じくフランス留学した西園寺公望とパリで親友となった。1878年2月、日本人として初めてパリ大学から法学士証書を授与された。この頃から光妙寺姓を名乗るようになった。

1878年に帰国、法制局専務など。1880年には前年に外務卿になった井上馨のもとで、外務省少書記官に転任した。その年帰朝した西園寺が東洋自由新聞社長に就任すると官僚のまま編集社員として加わったが、自由民権的な新聞であったことが問題になった。1881年に権大書記官に昇任。

1882年に外務書記官となってフランス在勤を命じられ、翌年パリに赴任した。

1884年帰朝命令を受け、翌1885年3月、外務省を依願免官となった。

その後4月より明治法律学校の講師となり、憲法講義を担当。

1886年8月より大審院検事となり、1889年7月には遞信省参事官を兼任した。

木曾恵禪 (1817-1896)

十二才で長善館文台に経史を学ぶ。十七で新井市正念寺勸学朗師について修業し、長岡長永寺に養子に入り継ぐ。さらに京都で本山学林で刻苦研鑽した。天保十二年教学振興について意見が合わず帰国。弘化二年、実践窮行を塾として境内に私塾「囂外塾(こうがいこう)」を開設し、僧俗の子弟や郷子弟に仏学や漢学を教えた。

遠近評判を聞いて蟄学する者が多かったという。

本山からの学階授与の案内も断って育英と布教に捧げた。資性温厚、篤実孝悌、かつ己に謹厳、人に寛容、頗る長者の風があつたが、事に臨んでは毅然として対峙した。衆に畏敬され人望高く、行により牧野侯および法王より数度賞賜を受け、明治二十九早死複本山司教を追贈された。

門下に真宗の高僧七里恒順、のちの東大総長小野塚喜平次らがいる。

互尊翁野本恭八郎 (1852~1936)

恭八郎は、幼少時から、小国の生家や藍沢南城の三余堂で儒教に触れ、また養子として長岡に来てからは仏教、特に星野嘉保子、木曾恵禪との交流から浄土真宗に深く触れる時間を持ちました。

そして仏教、儒教から多くを学んだ恭八郎は、最終的に、互尊止戈という言葉に行き着きました。その履歴を辿ることはできませんが、本当に多くの人の出会い、真摯な思考の結果だと思います。

1. 唯敬寺　浄土真宗本願寺派の寺院

20200425春日

(1) 江戸末期に、上田町から現在地へ

唯敬寺の開基は信州松本ですが、江戸時代になる前、長岡の上前島に移り、そして忠精公の頃に上前島から上田町に移ります。

(大手通から長永寺さんに曲がる、角のあたりのようです。)

～長永寺さんのあたりが上田町河戸になりますので、城の入口の町口御門とは100mほどの距離です。

さらに江戸時代の終わりになって、長岡藩御用蔵の拡張のため、赤川町(北文治町)と呼ばれた現在地に移転します。

(2) 赤川と柿川

保育園の建物とグランドの間を通っている川は赤川とよばれています。

赤川の上流は工業高校の西を通っています。その先は暗渠のようです。

下流は内川の柿川に流入していまして、場所は柿川戦災殉難地の碑のある柳原町の柳原公園の近くです。

柿川は江戸時代、信濃川に繋がる長岡船道(ふなどう)と呼ばれる水運の拠点でした。従って、赤川は内川を使った水上物流の終点に当たるのです。「内川と新川・赤川」の関連図を次頁に示します。

(3) 戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所

さらにその後、幕末の数年前、長原町(現在の草生津)に移転し、門前町の開設にも参加したそうです。長原町の寺院の位置は不明です。

寺院の現在地は、保育園を含めると広大な敷地ですが、そのころの唯敬寺境内は、いまの4、5倍はあったようですので、たぶん、そのなかのどこかでしょう。戊辰戦争では長岡藩の兵糧預かり所となって、炊き出しを行なったとされています。

～おそらく、上田町河戸から赤川に入り、そのまま長原町の唯敬寺境内に兵糧運び込んだのでは、と思われます。

(4) 明治初期、長岡花火のはじまり

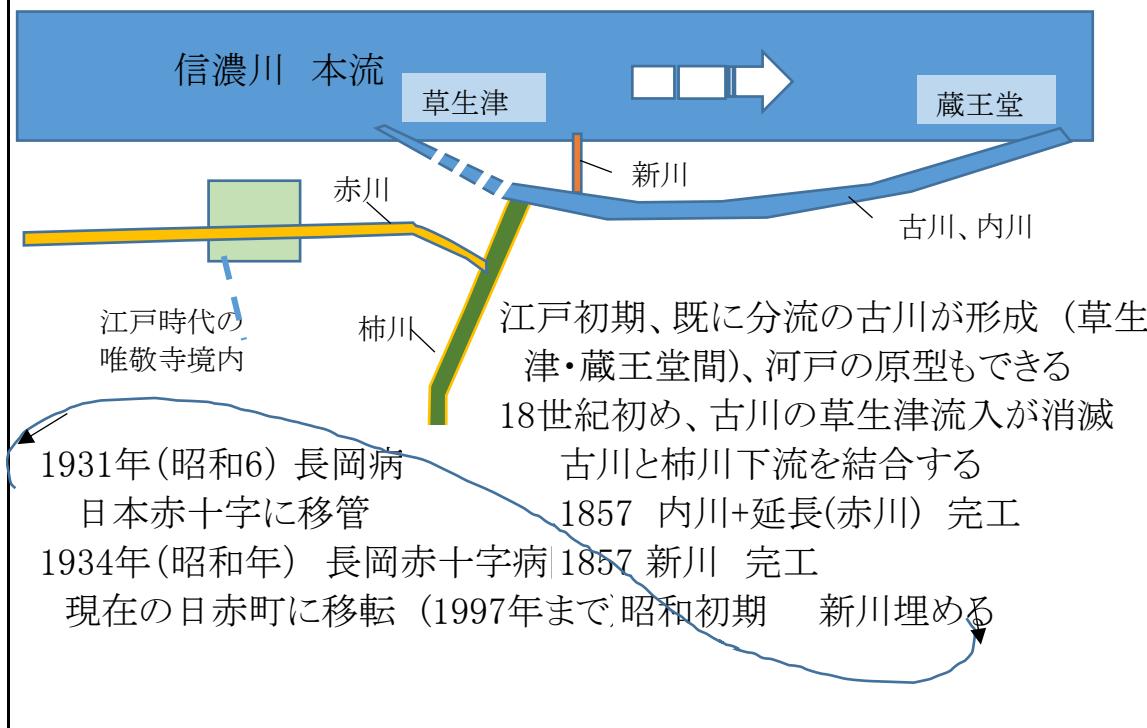
長原町は石打町と並んで「南廊の長原町」、「北廊の石打」と呼ばれるほどの歓楽街となりました。このころ、唯敬寺境内の水子供養の地蔵様を供養するために打ち上げた花火が、長岡花火のはじまりという説も、あります。千手町八幡様のお祭りが最初という説も有力ですが。

(5) 星野嘉保子の星野家菩提寺

星野嘉保子の星野家菩提寺であるとともに、星野嘉保子の事前活動、仏教普及活動に、ずっと支援してきた寺院です。

悠久山にある星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」のもとになった、西園寺公望の揮毫になる書が、唯敬寺さんの本堂に、掲げられています。

古川、内川、新川、赤川の変遷の簡略図



昔の長岡十二ヶ月の中 二月 吴服町蠟座稻荷初



(6) 星野嘉保子・復元像



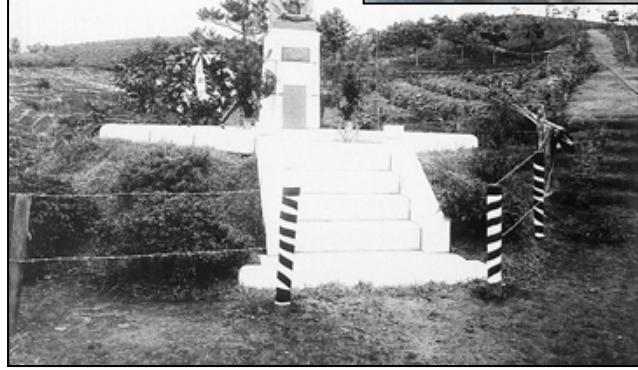
復元像の製作については、唯敬寺の檀家のなかに、画材店の店主・小山吉郎さんがおられ、高濱英俊氏を紹介され、依頼。高濱氏は、稻川明雄さんにヒアリングし、写真をもとに、復元像の構想を練ったようだ。当時の市長にも、協力を要請したという。資金は唯敬寺が拠出したが、完成後の開眼法要は、執り行なっていないという。

(草生津・唯教寺本堂前)

2. 星野嘉保子碑



1923年(大正12年)
建立の戦時金属供出
前の銅像
(武石弘三郎作)
長岡市史、及び、
長岡市政100周年
eライブラリより



3. 大正12年作像の銅像記、像内安置品、
及び、現在の嘉保子碑撰文

女師名嘉保本姓小川氏幼爲長岡醫星野宗仙所養胃其姓義父早歿門祚
淪落女師勤女工奉養母極厚義母爲許納學生某爲夫婿未醒某病歿女師
守志終身性精慧博綜接藝略通儒佛書有識見擢爲縣女紅場取締年四十
二創立長岡女學校實爲縣下女學校嚆矢當時人皆異而笑之女師曰今之
世女子亦不可不學苦心經營築校舍至再生徒淑婉有守明治三十七年以
衆望爲縣女子教育會副會頭一日誨琴生徒忽發疾隱琴而伏翌朝遂逝是
年十二月十九日也年五十七從住勝嗣家承業光昭遺教生徒益進大正十
一年有所感而閉校前後三十有三年生徒四千人追懷女師而不已相謀鑄
銅像建于悠久山鳴呼亦可以見其德入人之深矣

大正十二年六月
北粵處士
高橋茂撰並書

女師星野氏銅像記



長岡女学校謝恩会幹事
没後19年 発起人 父兄側10名の中に
坂牧善辰、木村清三郎の名がある

銅像鑄造 巨匠武石弘三郎
刻文撰者 鴻儒高橋翠村翁

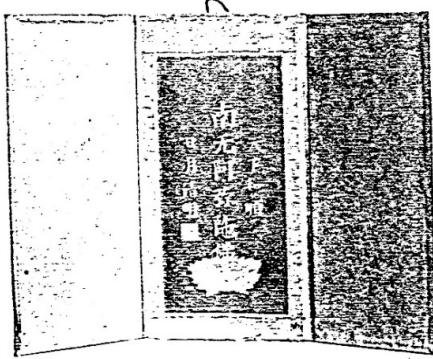
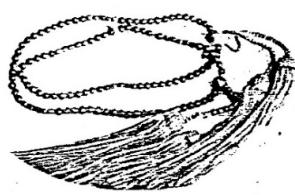
この銅像記は、下記の、現存する星野嘉保子碑の碑文（蒼紫神社社司從七位永井鈴次郎撰書）とは異なるものである。

星野嘉保子女史ハ嘉永元年西蒲原郡岩室村西船越庄屋小川寛三郎氏ノ長女ニ生レ
六歳ニシテ長岡表二ノ町医師星野宗仙ニ養ハル二十八歳ニシテ未来ノ夫タル人ノ
病没ニ遭ヒ女史ハ一生獨身ヲ決心シ慶應三年養父ノ死後家計困難ニ陥リシト
雖も能ク養母ニ孝養ヲ盡サル戊辰ノ戰乱ハ長岡ヲ燒土化シ女史ノ家モ又烏有ニ
帰シ一時横町梅田某ニ寄寓シ手藝ヲ以テ辛クモ生計ヲ立テラル家明治八年縣令永山
成輝氏の家庭教師ニ雇ハル翌九年新潟女紅場設立女史ハ女工ノ教育ヲ命セラレ在
任中教師ノ模範トシテ度々縣ヨリ賞與サレ終ニ生徒總取締ニ舉ラル全十二年其ノ
任ヲ辞シル全十三年長岡山田町ニ藝娼妓裁縫傳習所設置セラルルヤ其の教授トナル
全二十二年三月女子教育ノ必要ヲ感シ阪之上町ニ長岡女學校ヲ創立シ主トシテ裁
縫ヲ教授シ合テ和漢古今ノ烈女傳ヲ講シテ精神ノ修養ニ勤ム全三十年十月不幸火
災に罹リ翌年觀光院町牧野子爵家別邸ヲ讓受ケ全三十三年校舎落成其の開校ヲ見
ル當時長岡ニ未タ高等女學校ノ設ナク為ニ遠クヨリ入學スルモノ多ク益々其隆盛
ヲ見ル全三十四年佛教慈善會ヲ起シ大ニ淨財ヲ求テ慈善事業ニ盡サル全三十七年
十月新潟縣女子教育會副會頭ニ推薦サル斯クシテ嘉保子女史ハ一生ヲ長岡女學校
ニ捧ケ縣下女子教育ノ為ニ多大ノ力ヲ致サレタリシカ明治三十七年十二月十九日
五十七歳ヲ以テ病没サル大正十二年六月生徒等女史ヲ追懷シテ已マス相計リテ銅
像ヲ鑄テ悠久山上ニ建テ以テ其ノ徳ヲ永遠ニ記念ス

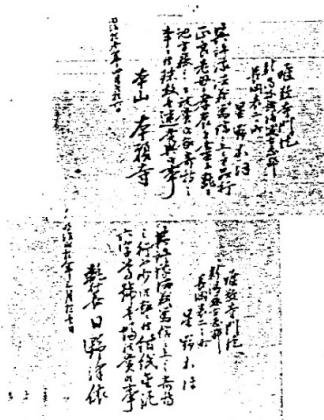
昭和十一年九月二十三日縣社蒼紫神社社司從七位永井鈴次郎撰書

本派本願寺より賞賜の紺紙金泥六字尊號と念珠及び其賞狀

木澤木彌寺より賞賜の紺紙金泥六字尊號と念珠及其賞狀



銅像胎内に上貳品を安置し奉る



4. 星野嘉保子碑の「以成肅雍之徳」について(2016年11月 春日正利)

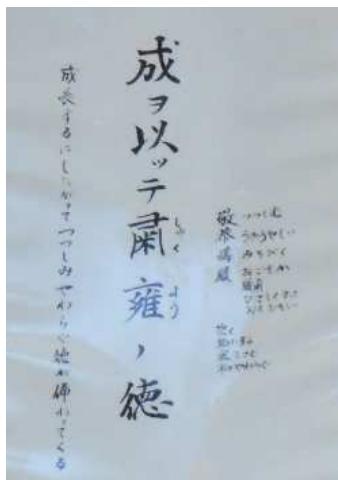
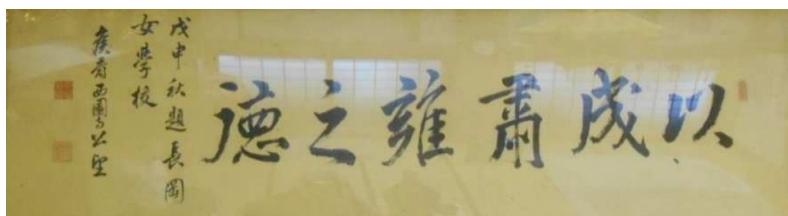
2017年10月改訂

「長岡歴史事典」には、「以成肅雍之徳」 せいしゅくをもつてとくのまもりとなす、つつしみ深く穏やかな徳(恵み)の人である、という意味と言われていますが、実際に西園寺公望が揮毫した扁額が、星野家菩提寺、草生津の唯敬寺本堂にあり、その扁額脇に掲げられている添書きの説明は、これと少し異なります。

本堂で拝見した扁額添え書きのご説明にある「成るを以って、肅雍の徳」の、「成長するにしたがって、つつしみやわらぐ徳が備わってくる」、という解釈は、この扁額が、学校で毎日生徒達が仰ぎ見る講堂に掲げられていたとの三条住職のお話と考え合わせると、なるほど、そう受け取るべき、とも感じます。

しかし、事典の説明のように、当時のご住職様が、日ごろの熱心なご門徒であった嘉保子さんの遺徳を偲んで、「つつしみ深いおこころのなかに、慈悲をたれるお方であった、という、嘉保子先生の優れた徳を讃えるようなことを書いてほしい」と、公望さんにお願いし、それに対して、「では、以前に書いた講堂の扁額の読み方を変えてみては」、と言ったという受け取り方もあるように思います。

阿弥陀様に深く帰依した先生ですから、この徳は、先生が日ごろ詠まれたであろう親鸞様の和讃の恩徳讃の「恩徳」、「仏の恩徳」であり、つつしみ深いおこころのなかに慈悲心を示される、というようなことではないかと、
拝察しております。
(春日の私見)



石碑の碑文

揮毫の年の戊申は明治41年(1908年)と思われます
星野嘉保子歿後4年たっております。

銅像が建立されたのは大正十二年(1923)、
記念の石碑が建立されたのは昭和十一年(1936)とされています。

西園寺公望公の筆



のものたれらへ興き書に氏勝野星子嗣養の自刀子保嘉秋年一十四治明が公寺園西

さいおんじきんもち

西園寺公望

嘉永3年～昭和15年11月 91歳没
明治・大正の大元老、能書家
立命館大学創設

読み：成ヲ以ッテ肅雍ノ徳

訳：成長するにしたがってつしみ和らぐ
徳が備わってくる

戊申（明治41年）秋書 ～西園寺公望59歳の時～

目良 卓 先生 訳

（工学院大学付属高等学校教諭）

5. 嘉保子年譜、仏教への帰依とご褒美

(1) 仏教への帰依とご褒美

- 1) 明治13年に、山田町唯敬寺で芸娼妓の裁教授に勤めるなどにより、同年 本願寺本山より、念珠一連。
- 2) 表町二ノ丁自宅に、長永寺の木曾恵禪師らとともに婦人談話会を開き、名僧知識を招いて仏教講話を聴聞し、婦人の知識向上に努めることにより、明治20年 本願寺本山より、六字名号。

以上の二点の品の写真は、長岡新聞 1996年の記事、4月27日(上), 5月11日(下) にありました。三章に転載しました。

3) 明治34年 仏教慈善会を起こす。

島地黙雷師ら高僧を歴訪して仏教慈善会設立の計画に賛意を得て、木曾恵禪師はじめ地方寺院の篤志家とともに諸方へ托鉢し、その喜捨淨財を以って仏教慈善会に寄付。

第一回事業として、山田町唯敬寺を借り受けて芸娼妓の裁縫教授所を設立。他に長岡病院はじめ市内開業医の賛成を得て細民に施薬・金品を与えた。

島地黙雷が明治31年秋に嘉保子にあてた漢詩は、黙雷師を歴訪した折りのものと、思われる。

(2) 嘉保子年譜

後日、追記の予定です。

(3) 実家、姜家、竹山家

後日、追記の予定です。

大竹家、竹山家をはじめ、当時の名家は、小国・山口家、蒲原・入澤家、和島・久須美家などと、婚姻や養子縁組などを通じて、お互いに親戚関係を結んでいたことを知るようになりました。

星野嘉保子の実家である蒲原・小川家も、分水・竹山家とつながりを持っています。

嘉保子の養嗣子の勝(まさる)氏も、新潟市西堀通りの浄光寺のご出身で、開祖は西園寺家の次男の方が新潟・鳥屋野に庵を結んだのが始まりとされる。その鳥屋院北山浄光寺は、慶長十年(1605)現在地へ移され、昭和16年当時の当主は三十五代目、始祖の時代には親鸞様が来られているとのこと。

6. 島地黙雷が星野嘉保子に贈った書

黙雷師（もくらい 1838-1911）は、明治時代に活躍した浄土真宗本願寺派の僧。本山の実務トップにあたる執行長（しゅぎょうちょう）を勤めた。1872年（明治5年）、西本願寺大谷光尊からの依頼によって岩倉使節団に同行している。

黙雷が明治31年秋に嘉保子にあてた、以下の漢詩が、唯敬寺に伝わる。嘉保子が仏教慈善会設立のため黙雷師に面会の折りのものと、思われる。

（1）島地黙雷さんの漢詩

終時何待佛來迎偏喜平生業事成
 念報身游光摶裡逍遙心到法王城
 明治戊戌 秋日為 星野女學長 默雷「印」「印」

（2）読み方

終時に何んぞ佛の来迎を待つ 偏に平生業事の成るを喜ぶ
 報身を念じ光摶の裡に游ぶ 逍遙の心は法王の城に到る

（3）補足

1) 「平生業成（へいぜいごうじょう）」とは、浄土真宗において、親鸞聖人の教えを漢字4文字で表した、いわば「一枚看板」とされている言葉です。平生業成の「平生」とは、死んだ後ではない、生きている現在ということ。

親鸞聖人は、人生の大事業のことを「業」と言われています。

人生の大事業とは、何のために生まれてきたのか、何のために生きているのか、苦しくともなぜ生きねばならないのか、という「人生の目的」のことあります。最後の「成」とは、完成する、達成するということですから、「平生業成」とは、まさしく「人生の目的が、現在に完成する」ということです。

その答えを、親鸞聖人はハッキリと示されています。

「人間に生まれたからには、これ一つ果たさなければならない大事業がある。それは現在、完成できる。だから早く完成しなさいよ」と生涯教えられたのが親鸞聖人ですから、聖人の教えを「平生業成」というのです。

（<https://1kara.tulip-k.jp/company>などを参考にしました。）

2) 報身を念じ とは

三身念佛(さんじんねんぶつ) 法身ほっしん・報身ほうしん・應身おうじんの三身を念ずる念佛。 鎌倉時代中期の浄土宗の僧、長西は『選択本願念佛集名体決』のなかで、『般舟三昧経』などでは三身念佛を説くのになぜ報身のみを念じるのかと問い合わせ、これについて『観経』などは、初心者のために報身の念佛を説くのであり、『般舟三昧経』などとは意図が別であると述べている。

浄土宗大辞典 <http://jodoshuzensho.jp/daijiten/index.php> / 三身念佛

3) 明治戊戌(つちのえいぬ)

ぼじゅつ 1898年 明治31年

島地黙雷(しまじ もくらい、1838-1911)

明治時代に活躍した浄土真宗本願寺派の僧。周防国(山口県)和田で

専照寺の四男として生まれる。雨田、北峰、六々道人などと号す。

西本願寺の執行長。

1868年(明治元年)、京都で赤松連城とともに、坊官制の廃止・門末からの人材登用などの、西本願寺の改革を建白し、1870年に、西本願寺の参政となつた。

1872年(明治5年)、西本願寺大谷光尊からの依頼によって岩倉使節団に同行、ヨーロッパ方面への視察旅行を行なった。使節団一行がイギリスに滞在しているとき、このころ条約改正に一定の進展がみられたといわれるオスマン帝国に対して一等書記官福地源一郎が派遣され、同国の裁判制度などを研究させたが黙雷はこれに同行している。

エルサレムではキリストの生誕地を訪ね、帰り道のインドでは釈尊の仏跡を礼拝し、その旅行記として『航西日策』が残されている。「三条教則批判」の中で、政教分離、信教の自由を主張、神道の下にあった仏教の再生、大教院からの分離を図った。また、監獄教誨や軍隊での布教にも尽力した。

1888年(明治21年)、雑誌『日本人』の発行所である政教社の同人となる。

1892年(明治25年)、盛岡市の北山願教寺第25世住職となつた。養嗣子の島地大等が第26世となる。

その一方で、明治21年(1888)、仏教に基づく女子教育をいち早く実践し、女子文芸学舎(現:武蔵野大学付属千代田高等学院・千代田女学園中学校)を創立した。他、幾多の学校運営に参画した。

(星野嘉保子の私立長岡女学校は、明治22年に開校、
黙雷から嘉保子への書は、明治31年)

浄土真宗系の学校であり、仏教に基づいた道徳教育を行っている。また、創立者島地黙雷が目指した「国際教養人の育成」の理念を継承し、国際バカロレア対応コースを設置するなど国際理解教育にも力を入れていること。

2016年には法人合併によって設置者が学校法人武蔵野大学になった。

2018年(平成30年)からは、高等学校は武蔵野大学附属千代田高等学院と校名変更・男女共学化の上で5つのコースを有する普通科高校となる。中学校は募集停止とし在校生の卒業を待って廃校の予定。

1888年(明治21年)9月 - 女子文芸学舎として現在地に創立

1907年(明治40年)10月 - 女子文芸学校と改称

1910年(明治43年)3月 - 高等女学校令により千代田高等女学校と改称

(1) 長永寺の現在地への移転

長永寺さんも、開基は信州で、慶長12(1607年)年に現在の長岡市城岡付近に移り、さらに元和元年(1615年)堀氏の長岡城下整備により現在地に至っているそうです。

(2) 長永寺恵禪住職と私塾「囂外齋」

木曾恵禪(1815-1896)

17代住職恵涯師の長女木曾操子(みさこ)師が、1839(天保9)年西蒲原郡砂子塚の本願寺派長宗寺より、恵禪師(1815年生まれ)を24歳の時を迎えて、18代住職となりました。

恵禪住職は漢学、宗学、天台華厳を越後学派僧(そう)朗(ろう)学んだ後、京都の学林で仏教を学びました。長永寺入寺後、1845(弘化2)年に境内に私塾「囂外齋(こうがいこう)」を開設し、僧俗の子弟に仏学や漢学を教えました。この囂外齋は操子坊守、長女の展子(のぶこ)師が恵禪住職を助け共に教育に当たりました。

三人の業績は後に「木曾三先生言行録」として出版されました。

恵禪師は資質穏和にして学徳高く、生涯をお念佛の繁盛と人材育成のために尽くされました。囂外齋は明治32年文部省の私立学校令により学則を更迭し、後の恵(え)然(ねん)・昨(さく)非(ひ)住職へと受け継がれてきました。囂外齋の主な出身者に、弓波(ゆみなみ)瑞(ずい)明(みょう)(龍谷大学学長)、小野塚喜平次(東京大学総長)をはじめ、学んだ子弟は4千名、卒業者は9百名を数えました。長永寺の本堂は、慶応元年(明治元年1868年)戊辰戦争の兵火に焼かれ消失しました。

以上、長永寺のウェブページ[°]の同寺歴史を参考にさせていただきました。

恵禪師は、長岡に養子に来たばかりの野本互尊翁 野本恭八郎を学問に誘い、その後、妻と三人の子女が通ったと、稻川さんの「互尊翁 野本恭八郎」に書かれています。

参考地図

